

第3 問題作成部会の見解

地 理 A

1 問題作成の方針

平成 21 年度大学入試センター試験では、高等学校学習指導要領の内容にそい、さらに本部会では大問の構成や内容について平成 20 年度問題の反省を踏まえ、慎重な検討を行った。作題上の留意点は以下のとおりである。

(1) 高等学校学習指導要領への対応

本部会では平成 20 年度問題の構成や内容を踏まえ、旧教育課程でも学習され、現行教育課程でも重要視されている事項（生活・文化や地球的課題など）や技能（地図や写真、統計の読み取りなど）の習熟度を、多角的に幅広く問うことを基本的な作題方針とした。

(2) 出題地域

身近な地域を含みつつ、世界各地の事象を幅広く取り上げるよう留意した。大問レベルでは、境港市と近隣諸国として中国を取り上げた。さらに、小問レベルでは世界各地の問題をバランス良く作題した。

(3) 出題内容

教科書及び高等学校学習指導要領の内容に準拠して作成した。具体的な出題の内容は以下のとおりである。

第 1 問 地理の基礎的事項

第 2 問 境港市周辺の地域調査

第 3 問 現代世界における地域の結び付きとその変化

第 4 問 中国の自然環境、生活文化及び産業

第 5 問 食料にかかわる地球的課題

(4) 内容上の工夫

高等学校学習指導要領の学習内容をより反映するために設問構成の一部見直しを行った平成 19 年度・20 年度問題の設問構成を基本的に踏襲した。平成 20 年度問題と同様に「地理的技能と調査」とし、問 7 を「地理 A」の独自問題とした。また、第 4 問の「世界の生活文化と環境」は、高等学校学習指導要領の「地理 A」の全体を横断的に問うことができることから 8 小問とし、第 5 問の「地球的課題と国際協力」を 6 小問とした。世界全体を視野に入れて各分野から満遍なく出題した。また、知識そのものを問うような問題になることを避け、代わりに地図や写真、統計など各種資料の読み取りと関連付けた出題に努めた。

(5) 構成等

大問数は 5 題で昨年と同様であり、総設問（小問）数も昨年同様の 36 題であった。また、昨年度と比べて、大問の配列を変更し、「地理 B」との共通問である「地理的技能と地域調査」を第 2 問に配置した。「地理 A」の特徴を考慮して、写真を使った問題（3 題）とともに図を 21 枚、表を 2 枚用い、基礎的な地理能力である地図や統計の読み取りを積極的に課す問題構成とした。写真や図表は出

題意図が明確となるようなものに努めた。また、誤解を招く表現や、複雑な言い回しを避けるよう努めた。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 「地理A」履修者にとって地理的基礎事項となる図法、時差、領土のほか、自然、文化などについてマクロスケールの基礎的知識を問うた。正答率から見て適切な問題であったと考えられる。

問1 時差に関する基礎的知識を問うたものであるが、正答率は予想どおり高かった。

問2 世界の大地形について、新期造山帯の分布に関する基礎的知識を問うたものであるが、あまりなじみのない山脈が正答であったので、正答率がやや低かった。

問3 ステップの自然環境に適応した生活様式を問う基本的な問題であり、正答率は予想どおり高かった。

問4 日本の領土の範囲に関する基礎的知識を、他の地域との比較の中で問うたものであるが、日本に関するもので正答率は高かった。

問5 世界の宗教分布と宗教施設の景観的特徴について基礎的知識を問うたものであるが、正答率から見て適切な問題であったと考えられる。

問6 球体である地球がどのように平面の地図上に表現されるかについて問うたものである。受験者が対蹠点^{たいせきてん}という概念にあまりなじみがないせい、正答率はやや低かった。

問7 世界の気候分布の基礎的知識について問うたものである。地図が正射図法で描かれ、歪曲^{わいきよく}した縁辺部の地点についても問うたためか、正答率は低かった。

問8 日本から遠隔地となる南アメリカ、アフリカ、南極の各大陸に関する基礎的知識について問うたものであるが、正答率は予想よりも低かった。

第2問 砂州上に位置している境港市を事例として、自然や産業の特徴について、実際に生徒が地域調査を行うとしたら、どのような点に着目し、どのような資料が必要であるのかを想定した問題である。難しい問題と易しい問題に分かれたが、大問全体の得点率は6割強であった。

問1 20万分の1の地勢図から、境港市とその周辺の地形の特徴を読み取らせる問題である。中海に形成されている三角州が小規模だったため正答率は1割半ばであった。

問2 問1の地勢図で読み取った弓ヶ浜半島の地形を、航空写真から確認する問題である。地形の特徴から撮影した地点と方向を考えることができたため正答率は7割半ばであった。

問3 地勢図と航空写真の情報とともに、2万5千分の1の地形図から境港市の土地利用の特徴を読み取る問題である。境港市の地形と土地利用の様子を読み取ることができたため正答率は8割程度であった。

問4 境港市の主要産業である漁業について、日本全体の海面漁業・海面養殖業生産量の傾向と境漁港を含めた主要産業の水揚量の傾向を比較して考察する問題である。一見すると境漁港の水揚量の傾向が沖合漁業の傾向と似ているため正答率は6割程度であった。

問5 問4で読み取った境漁港の水揚量の減少が、境港市の産業にどのような影響を及ぼしているのかを読み取る問題である。水産加工業の事業所数と出荷額の減少割合を比較できたため正答率は8割強であった。

問6 境港市が新しく力を入れている観光業について、境港市の主な観光施設への入込客数の推移

をもとに、更に調査を深めるための調査方法を考察する問題である。交通手段と訪問者数の調査の趣旨の違いをとらえることができたため正答率は7割半ばであった。

問7 境港市の国際化にかかわる境港の対外貿易について、環日本海諸国との輸出や輸入の内訳を地理的な見方や考え方から類推する問題である。日本とロシア、日本と中国との一般的な貿易の傾向から貿易の内訳を類推することが難しかったため正答率は5割程度であった。

第3問 現代世界の国・地域間の結び付きとその変化について多面的な理解を問うた。世界と日本の貿易の概況、日本への農産物輸入、外国と日本の間における滞在者数の推移、交通路線の歴史的变化、交通輸送手段や情報通信技術に関する近年の状況、国際的な軍事・政治地域組織などについて問うた。正答率の傾向は各問題とも受験者の成績分布に対応しており、識別力は妥当である。

問1 日本の輸入相手先について輸入額順位の時系列変化を問う問題である。産油国や近隣諸国との関係を理解していれば正答可能である。正答率は7割台で、妥当である。

問2 日本への輸入農産物の特徴を扱うことにより、貿易を通じた日本と諸外国とのつながりを理解できているか確認するねらいがある。正答率は6割台であった。

問3 日本に滞在する外国人の国別人口と、外国に滞在する日本人の国別人口を問うた。経済情勢や制度の変化を反映した、国別の推移の特徴を理解させるねらいがある。正答率は6割台であった。

問4 日本からヨーロッパへの交通路・交通手段が歴史的にどのように変化してきたか、それに伴い時間距離がいかに短縮されてきたかについての理解を確認するねらいがある。正答率は低調なもの、識別力は大きかった。

問5 交通機関や輸送手段に関する近年の特徴的な変化を理解できているかを問う文章題である。正答率は5割を超える程度であった。

問6 近年の情報通信技術の革新が、産業や生活にどのような変化をもたらしたかを理解できているか、確認するねらいがある。正答率は6割台で、識別力は高かった。

問7 東西冷戦の終結による政治環境の変化を契機に、様々な異なる動きを示した国家グループについて問うた。正答率は低調であったが、やや上位識別力が見られた。

第4問 本問は高等学校学習指導要領「地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題」における「世界の生活・文化の地理的考察」及び「近隣諸国の生活・文化と日本」から、中国を事例にした問題である。日本の隣国として歴史的にも結び付きが強い国であり、その生活・文化の日本との共通性、異質性を理解することが、今後の交流においても重要である。こうした観点からの地誌の大問として、広大な国土における多様な地形や気候、生活・文化、農業・工業などの特徴、日本との交流など広範な内容にわたって出題した。全般的に正答率は低調であったが、識別力は高かった。

問1 広大な中国では多様な地形が見られる。西南部の山岳地帯、内陸の盆地という高度差の大きい地形がどのように分布しているかを問う問題である。

問2 広大な面積を持つ中国は気候も多様である。中国の自然環境について雨量と気温から問う問題であり、識別力は高かった。

問3 都市景観はその地域の文化や経済発展の度合いを反映していることから、中国において特に経済発展の著しい都市の景観について問う問題である。正答率は低位にとどまった。

問4 中国は多民族国家で、少数民族が集住し、各居住地域では自治を行い、文化を維持している

ことについての理解を問う問題である。

問5 中国の多様な地域性について、各地域の料理の特徴から問う問題である。中国料理が、各地域の自然や農業の特性が反映されていることについての理解を問う問題である。正答率は低位であるが、識別力が高かった。

問6 中国の農業について、穀類、野菜、肉類の生産量の推移から問う問題である。国内消費よりむしろ近年の輸出の増大が、野菜の生産量増加に影響を与えていることを、関連付けて考えられるかを問うている。難易度は高かったものの、識別力は高い問題であった。

問7 中国の工業の特徴について、代表的な工業都市の発展とその背景についての理解を問うた。初めて経済特区としての指定を受け中国の経済発展を牽引する役割を果たしたシェンチェンを判別する問題である。正答率は低位であったが識別力は高かった。

問8 中国と日本の様々な交流の歴史があるが、身近なレベルでの交流が我々の生活とどのように行われて関連しているかについて問うた問題である。正答率は高かった。

第5問 人々が生活していくための最も基本的な要素の一つに食料がある。しかし、その食料について世界の状況を見てみると、必ずしも世界中の人々が十分な環境にあるわけではない。食料が余剰となっている国や地域もあるが、不足しているところもある。主に、その不足しているという状況などについていくつかの視点から問うた。また、他の国や地域との関係によっても影響されている面や、先進国における課題もあり、食料の生産や食生活に関連して、どのような課題があるのかを理解しているかを出題した。

問1 子どもの栄養状況は国によって大きく異なる。ここでは、発展途上国が多いアジアとアフリカについて、子どもの栄養状況を示す指標のうちの一つとして年齢の割に低体重の子どもについて、その地域的な特徴をとらえることができるか地図を用いて問うた。発展途上国が多いということでアジアとアフリカに限定したが、そのためもあり正答率が3割台と低かった。

問2 世界においては、国によって人々が十分な栄養を得られる地域とそうではない地域がある。また、どのように食物摂取しているかに多様性があるとともに、地域によってもある程度の特徴がある。ここでは、供給栄養量とそれに占める動物性食料の割合を示した図により、その特徴を問うた。8割台の高い正答率であった。

問3 輸出額と輸入額に占める食料品の割合は、国内の産業の状況を反映し、一次産品の輸出への依存や、食料の国外への依存などを見ることができることから、発展途上国や先進国の貿易構造についての理解を、図を用いて問うた。コートジボワールを問うたためもあり、2割台の低い正答率であった。

問4 世界のそれぞれの国や地域は、多様な自然環境の下にある。三つの地域について、それぞれの自然環境の中で、農地や水を確保するための取組について問うた。特徴ある3地域について問うたが、約4割の低い正答率であった。

問5 世界には様々な理由により食料を十分に確保できていない地域がある。食料を確保することに課題がある地域とその要因、そして解決策について、文章の正誤により問うた。正答率は約5割でやや低かった。

問6 近年、食の安全性についての関心が高まっている。世界の各地域における状況や取組について文章の正誤により問うた。約8割の高い正答率であった。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問 「地理A」履修者にとって地理的基礎事項となる図法、時差、領土のほか、自然、文化などについて「幅広く」問う意図は伝わったようである。

問1 「地球儀と世界地図との比較を意識した正射図法」で問うた工夫が評価され、適切な問題であったと考えられる。

問2 「新期造山帯の分布に関してあまりなじみのない山脈が取り上げられている」と評価されたが、そのような影響は正答率がやや低かったことからもうかがえる。

問3 『地理A』の学習状況を踏まえた標準的な問題」と評価され、適切な問題であったと考えられる。

問4 「日本の領土の範囲に関する正確の知識が必要である」との指摘があったが、受験者はそのような基礎的知識があり正答率は高かったものと考えられる。

問5 『地理A』ではフィリピンの宗教分布を学習する機会がない」との指摘があったが、世界的な宗教分布は地図帳などで扱われており、正答率から見て適切な問題であったと考えられる。

問6 「球体上の距離の理解を問う良問」と評価を受けたが、出題意図が伝わりにくかったためか正答率はやや低かった。

問7 地点を組み合わせた気候分布についての作問が評価されたが、地図が正射図法で描かれ、歪曲した縁辺部の地点についても問うたためか、正答率は低かったものと考えられる。

問8 出題は南アメリカ、アフリカ、南極の各大陸に関する基礎的知識であったが、選択肢の中には受験者になじみのないものがあり正答率は低かったものと考えられる。

第2問 「とても力を入れて作問された印象で大いに評価したいが、地図や図表が多く、時間がかかった。会話文は生きていない。」との評価と意見があった。地域有利とならないために地域調査問題では地域の資料を複数提示する必要があると考える。ただし、時間短縮に心掛ける必要がある。会話文を読むことによって、境港市で地域調査をする意図と地域調査の流れが理解でき、受験者は各設問に望むことができたと考える。結果として、地図や図表の組合せにより読み取りや考察に時間がかかると考えられていた問題の正答率は高くなっている。

問1 『地理A』では、海岸地形について詳細に学習する機会が少なく、地勢図で地形を読み取ることは容易ではない。」との意見があった。正答である陸繋島^{りくけいとう}の代わりに地勢図でも読むことができる山地などの地形を問う必要があった。誤答である三角州を選択した受験者が6割半ばであるため、「小規模な三角州が見られ」など表現の工夫が必要であった。

問2 『地理A』の学習状況を踏まえた標準的な設問であり容易に解答できる。」との評価であり、本問の意図が反映されたと考える。

問3 『地理A』の学習状況を踏まえた標準的な設問であり容易に解答でき、地形図に負担を軽減する工夫がなされている。」との評価であり、本問の意図が反映されたと考える。

問4 『地理A』的な問い方で好感を持てるが慎重な読み取りが求められる。よりの確に適否が判断できる表現を工夫する必要がある。」との評価と意見があった。文表現は工夫の余地があるが、④については、1990年と1993年の傾向が異なるだけでなく、1993年以降の減少率も異なるため誤答となり、識別力の高い問題であった。

- 問5 「問4と似通った問題設定で、読み取った事柄をもとに既習の知識と併せて適否を判断させるなど、出題の仕方に工夫が求められる。」という意見があった。問4で読み取った漁業の衰退の影響を問うているので似通った問題設定となった。地域調査問題では地域有利にならないように資料を組み合わせさせて読み取らせる問題とならざるを得ない。ただ、問1のように選択肢を一つの文章にまとめるなど出題の仕方の工夫は必要である。
- 問6 「地域調査の手法についての設問は、一般に作成が難しいが、問い方に工夫が見られる良問である。」との評価であり、本問の意図が反映されたと考える。
- 問7 「限られた地域における貿易の特徴が問われており、難易度が高い問題である。日本全体の貿易の特徴を踏まえて解答できるよう、適切な国や品目を選択してほしい。」という評価と意見があった。地域調査問題では、対象地域の貿易の特徴を問う必要があると考える。本問では境港が環日本海の国々との貿易が盛んであることが前提である。「地理A」でも取り上げる可能性が高い近隣諸国であるロシアの産業と日本とロシアとの貿易、中国の産業と日本と中国との貿易から総合的に判断できると考える。
- 第3問 「図表や文章など出題形式も工夫され」、「若干の設問を除き、難易度も『地理A』として適切である」、「『地理A』らしさを意識した面白い図表も見られるが、やや作りすぎ」などの評価を受けた。
- 問1 日本の輸入相手先に関する問題である。「地理A」の学習状況を踏まえた標準的な設問と評価された。「中国が第一位となったことを意識した時事的設問」を評価する指摘もあった。
- 問2 日本の農産物輸入に関する問題である。「身近な輸入農産物から海外との結び付きをとらえさせるよう工夫された適切な設問」、「単純に解けるが面白い設定」などの評価を受けた。
- 問3 日本に滞在する外国人と外国に滞在する日本人の動向から、日本と海外との結び付きをとらえられるよう工夫された適切な設問、知識の組合せによる良問との評価を受けた。
- 問4 日本からヨーロッパへの旅客経路の変遷を問う問題である。「作りすぎ」との指摘、「作問の苦労がしのばれる」との理解あるコメントも得た。「経路の示し方が工夫されている反面、その説明や問われていることへの理解に時間を要する。年代と所要時間を表にまとめる工夫などにより、問題文をより分かりやすく」する必要があるという点は、指摘のとおりと受け止めている。「アンカレジ経由はもはや教えていない」との指摘もあったが、航空航路の変遷に触れた教科書は数社あり、現代の高校生が意外な驚きを感じて興味を持てるような、時間距離の短縮の一事例として、学んでおいてもらいたい事項である。
- 問5 交通手段や輸送手段の近年の変化に関する問題である。東アジア諸国の高速高規格鉄道を「新幹線」と表記したことにつき、「『新幹線』が明確に定義されていないため、適否の判断に迷う受験者がいるのでは」との指摘を受けたが、この点に関しては、「新幹線」の語が教科書各社の表記の大勢を占めており、報道等でも用いられていることから、受験者にとってより身近であると判断した結果である。
- 問6 「『現代社会』で学習する内容でも判断が可能」との指摘を受けたが、いずれの選択肢も空間的側面を伴う地理的事象であり、また「地理A」の教科書で触れられている内容である。携帯電話の普及に関する④は「人口密度の低い国の一般的な事項ととらえて適否の判断に迷う受験者がいたのでは」との指摘もあったが、北欧における普及率の高さとその背景は教科書に頻出して

おり、誤文正答としては適切であると考え。

問7 旧ソ連、旧東欧諸国における国家の形態や国家間結合の変化を問う問題である。「地理A」での一般的な学習状況からすれば難易度が高い設問「世界史的」との評価を受け、実際正答率は低かった。ただ、国家間結合に関しては教科書の当該大問テーマ「現代世界の結び付き」の項に記述があるのはもちろん、バルト三国に関しては「近隣諸国」の一例としてのロシアの項で比較的詳しく述べられ、旧ユーゴについても、現代世界の諸課題の項などで触れられている。上位識別力は高い問題である（問4も同様）。

第4問 中国についての自然環境及び生活文化、産業、日本との交流について幅広い知識を問うた大問である。基本的な問題が多かったが、一つの国について問う問題であることから、学習していない受験者には難しい大問である、という指摘があった。また「地理A」全体での配点が最も高いことについて配慮してほしいとの要望があった。これに関しては、今後検討する必要がある。

問1 中国の地形の問題について、中国を学習していない受験者にとっては難しいとの指摘があったが、中国という個別の地域であっても、世界の大地形を理解する上で、しっかり把握しておくべきである。

問2 「基本的な学習で解答できるが、生活・文化との関係から自然環境を問う設問が望ましい」との指摘を受けた。今後、留意すべき点である。

問3 都市景観に関する写真問題は、二つの写真が類似し、説明も類似していること、ホンコンの写真は教科書ではほとんど見られない、との指摘があった。シャンハイの写真は複数の教科書で取り上げられており、ホンコンに関する記述も多い。近年の中国の発展を象徴するこれらの都市についての基本的理解は必要である。

問4 中国の少数民族の分布についての問題である。基本的かつ時事的な問題であるとの評価であった。

問5 中国の四大料理の問題である。「地理A」らしい題材だとの評価を受けたが、知識を問う問題であるとの指摘もあった。

問6 中国における農産物の生産量の推移については、肉類と野菜との判別が難しいとの指摘があった。確かに輸出量のデータなどを付加すると関連付けて解答を導きやすくなったと考えられる。

問7 工業都市について個別に問う問題は、「地理A」の学習状況からは難易度が高い設問との指摘があった。中国の工業発展において重要な要素である経済特区についての理解があれば、解答は容易に導き出せる問題である。

問8 日本との交流についての問題は「地理A」らしい題材だが、「単なる知識を問うており、写真や図表から選択させる問いの方がよかった」、との指摘があった。日本との交流についての理解は、極めて重要なことであり、記述文からも理解できる力は必要である。

第5問 食料にかかわる地球的課題に関する問題である。食料問題は教科書により扱いに差があること、「地理A」の学習範囲を越えるような設問があったことから、難易度にばらつきがあったとの評価であった。食料問題については、教科書によりその分量に違いはあるものの、いずれの教科書にも地球的課題の重要な内容として掲載されている。一部に、限定された国・地域のやや細かな内容が含まれていた部分もあるが、より特徴が分かりやすくするように工夫することに留意したい。

問1 指標としては新鮮であるが、受験者には分かりづらかったのではないかと、また、アジアとア

フリカに限定したことで格段に難しくなった、との指摘があった。発展途上国が多いアジアとアフリカの範囲を図示したが、世界全体を示す方がよいのではないかと留意したい。

問2 世界の3地域の食料摂取状況を示す図の読み取りで、「地理A」として適した設問の例として評価された。基本的な図の読み取り問題であった。

問3 「地理A」の学習状況からすると難易度が高いとの意見があった。それぞれの国がある地域やそれぞれの国の特徴をよく検討すると解答に至ることができると考えられるが、難しかったようだ。取り上げる国について、例えば、アルジェリアの代わりに学習で取り上げられることが多いサウジアラビアの方が望ましいとの指摘もあり、配慮していきたい。

問4 「地理A」の学習状況からすると難易度の高い設問との意見があった。取り上げた三つの地域の自然環境なども合わせて考えると正答に至ることできると考えられるが留意したい。

問5 基本的な設問であるが、具体的な地域や事例を示すなどの工夫が必要との意見があった。大問の構成としては、あるいは出題の方法として、ある程度一般的な内容についても問うことは意味があると考えている。

問6 教科書では必ずしも多く取り上げられてはいないが、時事的な設問で解答は容易とされた。

④の選択文のみ時代が古いとの指摘があったが、食の安全性にかかわる重要な事柄の一つでもあると考えて出題したものである。

4 まとめ—今後の問題作成に当たっての留意点

- (1) 今年度も、全般的に高等学校学習指導要領の内容にそった出題であり、昨年と同様に複雑な図表の読み取りは少なかったものの、一部に「地理A」の学習範囲で取り上げるには一般的でない事項や地域からの出題が見られるとの指摘があった。また、ただ図表を読み取るだけで地理的な知識がなくても簡単に解答できる問題が見られたとの指摘もあり、今後の問題作成に当たって十分な検討・工夫が必要となる。
- (2) 難易度については、昨年に比べるとやや難化したとのことであり、その原因として、地図と図表や地図と写真を組み合わせた問題が増えたことや「地理A」の中で取り上げられることが少ない事例や地域に関する問題が増えたことがあげられている。しかし、A科目の中では「地理A」の平均点が最も高く、最低の「世界史A」との平均点の差は昨年度よりも広がった。また、4択の割合が日本史や世界史に比べると少なく、このことが受験者の中で受験科目の中から地理を避ける傾向につながりかねないとの懸念も出されており、この点については十分な配慮が必要である。さらに、「地理A」・「地理B」の共通問題については、自然環境に関する設問が「地理A」の受験者には難易度が高く、「地理A」単独の問題作成が望ましいとの指摘があるため、引き続き検討を重ねる必要がある。なお、問題数については、大問、小問とも適切との評価であった。
- (3) 形式については、昨年度に比べると地図を使った出題が増えたこと、特に大問のテーマ設定において地図が用いられたことに関して、工夫が見られたとの評価を受けた。配点については、各問3点の配点をした事項や事例を選択して扱う内容の大問に関して、問題の内容構成の上からその改善が要望されており、今後検討が必要であろう。地図・写真については、一部にやや不明瞭あるいは読図に適切とは言えないとの指摘があったが、全般的には分かりやすいとの評価であった。
- (4) 全体として、新しい高等学校学習指導要領の趣旨にそった作問であったが、今後も世界の諸地域を

比較関連させながら、地域的特色や一般的共通性を総合的に把握させるような工夫を「地理A」らしい設問の中に反映させていく必要がある。特に出題については、高等学校教科担当教員からの指摘にもあるように、特定の学習事項や地域の知識・理解だけを問うのではない出題を目指し、公平な問題作成を心掛ける必要がある。また、要望にあるように「国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う」ことを念頭に置きつつ問題作りに取り組むことが肝要である。そのためにも、今後とも諸方面からの忌憚きたんのない御意見をお寄せいただければ幸いである。

地 理 B

1 問題作成の方針

平成21年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、高等学校学習指導要領で学習した生徒の4回目の入試に当たる。本部会では大問の構成や内容について平成20年度問題の反省を踏まえ、慎重な検討を行った。作題上の留意点は以下のとおりである。

(1) 高等学校学習指導要領への対応

本部会では平成20年度問題の構成や内容を踏まえ、旧教育課程でも学習され、新教育課程でも重要視されている事項（現代世界の系統地理的・地誌的考察や地球的課題など）や技能（地図や写真、統計の読み取りなど）の習熟度を、多角的に幅広く問うことを基本的な作題方針とした。

(2) 出題地域

身近な地域を含みつつ、世界各地の事象を広く取り上げるよう留意した。大問レベルでは、境港市の地域調査とカナダの地誌的考察を取り上げたが、小問レベルでは、さらに日本の諸都市をはじめとして世界各地の問題をバランス良く配置した。

(3) 出題内容

教科書及び高等学校学習指導要領の内容に準拠して作成した。具体的な出題の内容は以下のとおりである。

第1問 ヨーロッパとその周辺地域の自然環境

第2問 境港市周辺の地域調査

第3問 農林水産資源とそれを利用した産業

第4問 村落、都市

第5問 カナダの地誌

第6問 現代世界の諸問題

(4) 内容上の工夫

高等学校学習指導要領の学習内容をより反映した内容にし、「地理B」の独自性をより明確に出そうと配慮した平成20年度問題の設問構成を基本的に踏襲した。内容は、世界全体を視野に入れて各分野からできるだけ満遍なく出題した。また、知識そのものを問うような問題をなるべく控え、地図や写真、統計など各種資料の読み取りと関連付けた出題を心掛けた。

(5) 構成

大問数は、昨年度同様6題であるが、小問数は1問増えて、37問とした。また、昨年度と比べて、大問の配列を変更し、「地理A」との共通問である「地理的技能と地域調査」を第2問に配置し、「地理A」と6小問を共通とした。配点は、第2問を3点小問のみとし、それ以外は3点小問と2点小問の混在とした。「地理B」の特徴を考慮して、主題図や統計を利用して解く問題を多くした。全体で27枚の図と2枚の表、さらに今年度は2組の写真を用いて、基礎的な地理能力である地図や写真、統計の読み取りを積極的に課す問題構成とした。組合せ問題数では6択問題は昨年度と同数（11問）であったが、8択問題が1問増えた。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 自然地理分野の出題として、ヨーロッパ地域の自然環境について、気候（気温、降水量）、大地形、海底地形、自然災害、局地風、植生、湖の成因、カルスト地形に関する小問を設定し、総合的にその特徴を問うた。大問の得点率は6割程度であった。

問1 三つの異なる気候区に属する4地点の気温・降水量を比較し、その中から特に地中海性気候の特徴についての理解を問うた。正答率はほぼ8割であった。

問2 ヨーロッパ北部の大陸棚とプレート境界の分布から、この付近の海底地形に対する理解度を問うた。プレート境界の分布に関する理解度は高かったが、大陸棚の分布に関しての理解度は低く、正答率は4割を下回った。

問3 ヨーロッパに分布する構造平野、古期造山帯、新期造山帯の中から4か所の大地形について断面図を示し、それらの地形的特徴に関する理解を問うた。正答率は5割程度であった。

問4 ヨーロッパの地震・火山・氷河の分布に関する知識をもとにして、3地点における自然災害についての理解を問うた。正答率は6割を超えた。

問5 ヨーロッパの気候の地域特性に関する理解を、局地風の知識から問うた。8択の設問であったが、正答率は6割程度であった。

問6 世界の気候・植生の理解をもとにして、ヨーロッパの植生分布の地域特性について知識・理解を問うた。正答率は7割弱であった。

問7 ヨーロッパの長期の環境変化（氷期—間氷期サイクル）に関する理解を、形成された地形の理解から問うた。正答率は9割弱であった。

問8 パリ盆地のケスタ地形に関して模式図と併せてその成り立ちを問うた。選択肢の表現にやや難しい部分があったせいか、正答率は5割程度にとどまった。

第2問 砂州上に位置している境港市を事例として、自然や産業の特徴について実際に生徒が地域調査を行うとしたら、どのような点に着目し、どのような資料が必要であるのかを想定した問題である。資料を丁寧に読み取れば正答を導くことができる問題が多かったため大問全体の正答率は7割強であった。

問1 20万分の1の地勢図から、境港市とその周辺の地形の特徴を読み取らせる問題である。中海に形成されている三角州が小規模だったため正答率は2割強であった。

問2 問1の地勢図で読み取った弓ヶ浜半島の地形を、航空写真から確認する問題である。地形の特徴から撮影した地点と方向を考えることができたため正答率は8割程度であった。

問3 地勢図と航空写真の情報とともに、2万5千分の1の地形図から境港市の土地利用の特徴を読み取る問題である。境港市の地形と土地利用の様子を読み取ることができたため正答率は9割程度であった。

問4 境港市の主要産業である漁業について、日本全体の海面漁業・海面養殖業生産量の傾向と境漁港を含めた主要産業の水揚量の傾向を比較して考察する問題である。一見すると境漁港の水揚量の傾向が沖合漁業の傾向と似ているため正答率は7割程度であった。

問5 問4で読み取った境漁港の水揚量の減少が、境港市の産業にどのような影響を及ぼしているのかを読み取る問題である。水産加工業の事業所数と出荷額の減少割合を比較できたため正答率

は9割弱であった。

問6 境港市が新しく力を入れている観光業について、境港市の主な観光施設への入込客数の推移をもとに、さらに調査を深めるための調査方法を考察する問題である。交通手段と訪問者数の調査の趣旨の違いをとらえることができたため正答率は8割半ばであった。

第3問 農林水産資源とそれを利用した産業について、栽培植物の起源（起原）地、小麦の生産、畜産業や水産業の地域的な特徴、木材の生産と需給の世界的状況などについて幅広く設問を展開した。設問方法としては、文章による選択、組合せ、正誤の他、世界地図や小麦カレンダーなども用いた。

問1 栽培植物の起源地について世界地図を用いて問う設問である。基本的な作物についての知識を問う設問であり、正答率は7割後半で高かった。

問2 問1で問うたように、局地的に発生したと考えられる植物栽培が、各地に伝播し、今日の世界の食料供給がなされている。ここでは小麦カレンダーにより年間を通じた小麦の供給がなされていることを示し、小麦の播種期と収穫期の違いにより小麦生産地の位置を問うた。インドを問うたため、正答率は約5割でやや低かった。

問3 畜産業の国による特徴の違いについて、特徴的な4か国を示して、説明文の選択により問う設問である。

問4 生物資源が国際的に取引されていることを、森林資源を事例として考える設問である。世界地図を用いて、生産国（伐採）と輸入・輸出との地域差について考えることを求めた。よく理解されており高い正答率であった。

問5 水産業の国による特徴の違いについて、基本的な知識を問う設問であり、8割台の高い正答率であった。

問6 農業のグローバル化とそれに関連する内容について、その正誤を問う設問であり、これも8割台の高い正答率であった。

第4問 世界と日本の都市・村落に見られる特徴を模式図や地図、統計指標の読み取りから問うた。村落の立地・形態、都市整備・再開発、グローバル化に伴う移民の流入や多民族社会の社会・空間的特徴など、現代都市に関する設問を作成した。また、性格の異なる日本の3都市のデータ比較及び、商業施設の立地や特徴に関する写真を用いた小問により大問を構成した。

問1 世界と日本に共通して見られる地割、道路、家屋の配置形態に着目し、その特徴について理解しているかどうかを問うた。正答率は5割台前半とやや低かった。

問2 都市の形成時期や機能、文化などが反映されている都市形態に着目し、世界的な都市の形態的特徴に関する基本的な知識を問うた。正答率は5割台後半とやや低かった。

問3 近代化あるいはグローバル化に伴う都市整備・再開発に関する基礎的な理解を問うた。一部の都市については受験者のなじみのないものもあったようだが、正答率は6割台前半であり、標準的な問題であった。

問4 ロサンゼルスの大都市圏を事例に、主要な人種・民族集団四つ（黒人、アジア系、白人、ヒスパニック）のセグリゲーションの特徴について問うたが、受験者にとってはやや難解であったか、正答率は4割弱と低かった。

問5 性格の異なる3都市（仙台市、千葉市、浜松市）を取り上げ、統計指標の読み取りから都市の機能的特徴を問うた。基礎的事項と思われるが、正答率は5割弱と低かった。

問6 立地や機能により異なる商業施設の景観を写真で読み取り、その特徴を理解しているかどうかを問うた。内容的にはやや平易だったようであり、正答率は7割台後半と高かった。

第5問 カナダの地誌的考察に関する問題である。従来この国を中心とした地誌に関する問題はほとんど出題されてこなかったため、この国に焦点を当てた。中高緯度に位置するこの国の自然環境の特徴を理解しながら、それで展開される産業と生活・文化の地域性を総合的に考察できるかを問うとともに、アメリカ大陸をはじめ周辺地域との関係についても理解できているかを問うた。あまりなじみのないカナダ一国に絞った設問であったため、やや難しい問題であった。

問1 中高緯度に位置するカナダにおける気候・地形・土壌・植生などの自然環境の特徴をその地域性に注目しながら問うた。基本的な問題であるが、正答率はやや低かった。

問2 カナダの代表的な農業地域である春小麦地域を問うた。アメリカ合衆国の地誌でも学ぶなじみのある事項であり、正答率はかなり高かった。

問3 カナダの諸都市の産業についてその背景とともに問うた。カナダの地誌を詳しく学習していないせい、正答率は低かった。

問4 カナダとアメリカ大陸の諸地域やその他の地域との関係について、移民の出身地域から問うた。カナダの移民については詳しく学習していないせい、正答率はやや低かった。

問5 カナダ国内の地域性を特徴付けるものの一つとして言語分布があり、英語とフランス語の母語別人口についてその地域性を問うた。カナダ地誌においては頻出事項であり、正答率はかなり高かった。

問6 カナダと経済的関係の強いアメリカ合衆国及びメキシコとの双方向のつながりの様子を、貿易額・品目の観点から問うた。正答率から見て適切な問題であったと考えられる。

第6問 地球的課題に関する大問である。人口をキーワードとし、人口問題とかかわりの深い環境、食料、少子化・高齢化、女性の社会進出について、世界各地の地域的差異や類似性の理解を問うた。大問全体の正答率は6割台半ばで、「地理B」全体の得点率とほぼ等しい結果であった。

問1 世界の1人当たりの水資源利用可能量の地域差について、その背景を人口と気候とのかかわりから理解できているかを問うた。正答率は7割台半ばとやや高かったが、大問の取りかかりの問題としては適切であったと考える。

問2 発展途上国の中でも、経済発展に伴う医療の進歩や保健衛生面の改善の違いを背景とした地域差があることについての理解を問うた。正答率は7割台であった。

問3 発展途上国の食料需給問題には、人口増加、農業生産力や経済力等を背景とした地域差があることについての理解を問うた。正答率は6割台後半であった。

問4 世界の少子化や高齢化の進展状況には、地域差があることについての理解を問うた。正答率は7割台であった。

問5 女性の社会進出には、宗教、文化や経済状況を背景とした地域差があることについての理解を問うた。多くのイスラム社会において女性の社会進出が遅れていることについての理解が弱かったため、正答率は4割台とやや低かった。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問 ヨーロッパ周辺という特定地域の自然環境に関する大問であったが、地域的に「受験者には

安心感があった」という評価を受けた。一部に細かな知識や既習事項でない設問も見られたとの指摘もあったが、「全体的には標準レベルの設問が多い」という評価をいただき、ほぼ適切な出題であったと考える。

問1 「タリンとワルシャワの違いが難」という指摘もあったが、一方で「ヨーロッパ周辺の気候分布についての基本的な知識があれば容易に解答できる」との評価もあり、正答率から見ても基本的な設問であったと考える。

問2 「面白い図」との評価も受けたが、ヨーロッパ付近の大陸棚分布についてはほとんど学習されていないためか、第1問中では難問であったと考える。

問3 地形断面図の判別に一部戸惑う者もあったようであるが、「地図を見る力が必要とされる良問」との評価もあり、学習の程度により難易差が現れたと考える。

問4 ヨーロッパ周辺の自然災害について「やや細かい知識が必要」との指摘があったが、ヨーロッパ周辺における総合的な自然環境の理解を問うには適切な問題であったと考える。

問5 「局地風について、名称だけでなく、その特色とメカニズムまで理解していないと正答できない良問である」との評価のとおり、正答率は学習の程度により異なると考える。

問6 「植生に関する基本的な理解ができていれば解答は可」との評価や7割弱という正答率から見て、適切な基本的問題であったと考える。

問7 「平易」あるいは「容易」との評価がなされたように、この地域がかつて氷河に覆われていたという知識があれば、すぐに正答に結び付いたと考えられる。正答率も9割弱に及んだ。

問8 選択肢の説明に「やや難しい表現があったため戸惑った受験者もいた」との指摘のとおり、単にケスタ地形の名称を問う設問に比べると、難易度は高かったと考える。

第2問 「地勢図、地形図、写真、グラフなど多様な資料を用い、それらを複合的に分析し、判断する力・活用する技能が試された。『地理B』では標準の内容で、グラフを読み取る設問が複数あり、解答に時間を要するが正答は得やすかっただろう。」との評価と意見があった。地域有利とならないために地域調査問題では地域の資料を複数提示する必要があると考える。ただし、時間短縮に心掛ける必要がある。地域調査にストーリー性があるため、地図や図表の組合せにより読み取りや考察に時間がかかると考えられていた問題の正答率は高くなっている。

問1 「受験者が地勢図からの読み取りに不慣れである、大根島が一見して陸繫島に見える、飯梨川の三角州が典型的な形態でない。」との意見があった。正答である陸繫島の代わりに地勢図でも読むことができる山地などの地形を問う必要があった。誤答である三角州を選択した受験者が6割強であるため、「小規模な三角州が見られ」など表現の工夫が必要であった。最上位群の受験者の正答率は5割程度であり、識別力の高い問題であると考ええる。

問2 「弓ヶ浜半島の形状、江島との位置関係を手掛かりに判断すれば容易に解答できる。」との評価であり、本問の意図が反映されたと考える。

問3 「複数の資料を複合させて判断する力を必要とするが、地形図に関する基礎的な知識があれば容易に解答できる。」との評価であり、本問の意図が反映されたと考える。

問4 「解答に時間を要するが、選択肢を正しく読み、落ち着いて考えることができれば容易に解答できる。④の『同じ傾向』はあいまいな表現である。選択肢の内容に難易度差が大きい。」との評価と意見があった。④の「同じ傾向」は、1990年と1993年の傾向が異なるだけでなく、

1993年以降の減少率も異なるため同じ傾向とは言えないと考える。ただし、文の表現は工夫の余地がある。①と②は一つの図から、③と④は二つの図から読み取る問題として設定しているため難易度に違いが生じている。

問5 「解答に時間を要するが、選択肢の文を正確に読み取ることができれば容易に解答できるが、出題の仕方に工夫が求められる。」という評価と意見があった。本問の意図が反映されているが識別力が弱い問題となっている。正答の②で製造業の水産加工品関係とともにその他を含めた文を作成したり、問1のように選択肢を一つの文章にまとめるなど出題の仕方を工夫する必要があった。

問6 「調査の目的を正確に読み取った上、各選択肢との整合性を判断することができれば容易に解答できる。」との評価であり、本問の意図が反映されたと考える。

第3問 農林水産資源や第一次産業について幅広く出題され、全体的に標準的な出題傾向にあり、受験者にとってはなじみのある取り組みやすい設問が多かったとの意見であった。全体として正答率も高めのものが多かった。大問全体の構成として、もう少し難易度の高いものも含めた方が、学習効果の測定として更によかったと思われる。

問1 大問の最初に当たり基本的知識を問うものであったので、容易に解答できるとの評価であった。

問2 インドの小麦栽培について、収穫期や播種期の学習は多くはなく、受験者が戸惑ったであろうとの指摘があった。図に示された播種期、収穫期の情報と、地球上の位置などから正解に至ることができると考えられる。

問3 畜産業の地域的な特徴の理解により容易に解答できると評価された。

問4 木材の生産と需給についての基本的知識により容易に解答できるとの評価であった。三つの世界地図を組み合わせる設問であり、よく理解されていたと考えられる。

問5 中国やペルーでの水産業の特徴の理解により容易に解答できるとの評価であった。

問6 米が自給的傾向の強い作物であることを理解していれば容易に解答できるとのことであった。

第4問 世界と日本の都市・村落に見られる特徴を模式図や地図、統計指標の読み取りからの出題であった。都市・村落については毎年の頻出事項であり、パターン化した問題からの脱却という視点も必要との判断から、基本的事項を問いつつ出題形式を工夫した。しかし、細かな知識を必要としたり、あるいは見慣れない形式の図表が多く難しいとの指摘を受けた点については、今後留意したい。

問1 世界と日本の都市・村落に共通して見られる特徴について理解しているかどうかを問うたが、細かな知識を必要とするとして戸惑うとの指摘を受けた。この点については、より分かりやすくなるように留意したい。

問2 街路形態などの世界的な都市の形態的特徴に関する基本的な知識を問うたが、重要な学習事項ではなく受験者が戸惑ったのではないかと指摘については、今後留意したい。

問3 近代化あるいはグローバル化に伴う都市整備・再開発に関する基礎的な理解を問うたが、細かな知識が必要で難しいのではないかと指摘を受けたが、正答率はおおむねよく、標準的な問題であったと思われる。

問4 ロサンゼルスの大都市圏を事例に、主要な人種・民族集団のセグリゲーションの特徴につい

て問うたが、受験者にとってはやや難解であり、正答率が低かった点については、今後の作問時に留意していきたい。

問5 性格の異なる3都市（仙台市、千葉市、浜松市）を取り上げ、標準的な問題であったと思われる。正答率がやや低かった点が気になるが、各種統計から都市の特徴を読み取る問題は基礎的であり、今後も重視していきたい。

問6 立地や機能により異なる商業施設の景観を写真で読み取り、容易な問題であったと指摘を受けた。問い方については、もう少し工夫を重ねていきたい。

第5問 「地誌の学習対象としてなじみの薄いカナダについての出題であったため、やや難しい問題であった」との評価であるが、最近、カナダへはアジアからの移民が多く、多文化主義ということから日本でも注目されていることから、周辺に地理的な素材が豊富であり出題に至った。

問1 「太平洋岸の西岸海洋性気候はなじみがない」という指摘であるが、大陸上の位置から類推は可能であり、他の選択肢の内容も考え合わせると標準的な問題であったと考えられる。

問2 「アメリカ合衆国の地誌でも学ばなじみのある事項であり、容易な問題」との評価であるが、そのため正答率はかなり高かったものと考えられる。

問3 教科書の中で情報量が少ない都市も含まれていたが、取り上げたものはカナダ国内では主要都市であり、選択肢の文はその特徴をよく反映したものであると考えられる。

問4 最近、アジアからカナダへの移民が多くなり、日本でも様々な場面で注目されており、このような特徴を反映した問題であると考えられる。

問5 カナダの言語分布はカナダ地誌においては頻出事項であり、「容易な問題」との評価を受けた。

問6 カナダと経済的関係の強いアメリカ合衆国及びメキシコとの双方向のつながりを問うた問題で、「地理的な考え方を必要とする良問」と評価を受けた。

第6問 「幅広い知識が必要とされるが、基本的な事項を素直に問う設問が多く、全体的には標準レベルの問題である。」との評価を得た。「発展途上国間の開発度の差を判断材料とする設問は難度が高くなる。全体に正答率は低かっただろう。」との指摘も見られるが、大問の得点率は「地理B」全体の得点率を若干上回る結果となっており、ほぼ適切な難度であった。全般的に識別力を持つ問題であった。

問1 「人口密度に関する単純な知識で正答できてしまう。」との指摘があった。今後、発問方法について工夫する必要があるだろう。

問2 「経済発展とともに医療の普及が進行することを理解していれば容易に解答できる。」「途上国でもアジア、アフリカ、ラテンアメリカで開発度が異なることを意識して授業をする必要を示唆しており評価できる」などの本問の意図にそった評価を得た。

問3 「それぞれの国を想起させるキーワードに注目できれば容易に解答できる。」との評価を得た。「難問となっている。」との意見も見られるが、正答率は6割後半とほぼ目標のとおりであった。

問4 「これは良問である。」との評価を得た。「基礎的知識があれば容易に解答できる。」との指摘もあるが、正答率は7割を若干上回る程度であり、おおむね適切な難度の範囲内と考えられる。

問5 「宗教や産業構造、経済発展の度合いなど各国の特徴を総合的に把握する力が求められる良

問である。」が「難問である。」との評価を得た。正答率はやや低いが、上位群において高い識別力を示しており、大問の最後の問題としては適切な作問であったと考える。

4 まとめ—今後の問題作成に当たっての留意点

- (1) 全般的に高等学校学習指導要領の目的や内容にそった出題であり、広範囲にわたる地域から出題され、基礎的な知識を問う標準的な問題を中心に、地図や統計資料の読み取りなど「地理の見方や考え方を問う設問も適宜組み込まれているとの評価を受けた。一方で、小問の中には都市名など細かな知識を必要とする難問もあり、問題による難易の差が大きくなっているとの指摘があった。この点については、今後の作問において十分に留意する必要がある。
- (2) 難易度については、平均点が 64.45 点で、昨年度と比べて 1.91 点の下降であり、やや難化傾向にあったが、「適切な内容と難易度」との評価も受けた。他の地歴科科目との比較では、「世界史B」との平均点は縮小したが、「日本史B」の平均点が下降したため同科目との差は拡大した。やや難化した原因として、第2問の「地域調査」で図表の読み取り時間を費やしたことや細かな知識を必要とする小問が一部に見られたことなどがあげられており、今後の改善点として留意しなければならない。
- (3) 今年度は、昨年度と比べて小問数が1問増え37問となった。また、大問の配列を変更し、「地域調査」を第2問に配置した。これらの変更点については、今後の受験者の解答状況などを見ながらその妥当性を検討していく必要があるだろう。設問形式については、昨年4択と6択の問題数は同じであるが、8択が1問増えた。しかし、判定しやすい問題であったとの評価もあり、このことが難易度に影響したとは考えられない。ただし、今後の作問においては組合せ問題を安易に増やすようなことは避けなければならない。今年度は、「地理B」においても2組の写真を用いたが、写真の鮮明度が増したとの評価があった。「地理A」も含めて、今後とも適切で鮮明な写真を用いることを心掛けたい。
- (4) 全体として、今年度の問題も高等学校学習指導要領の趣旨にそった出題であり、地理的知識や地理的思考力に基づいて解答する設問も多く、全体的には標準的な問題であったとの評価を得た。さらに、センター試験問題の検討6視点のいずれの項目においても目標を達成し得たとの評価も得られた。ただし、一部の小問について細かな地理的知識や読み取りに時間を必要とする設問が見られたとの指摘があり、今後これらの点に留意して作問していく必要がある。なお、より良い作問のため、今後とも諸方面からの忌憚^{きたん}のない御意見をお寄せいただければ幸いである。